





# 阿波野青畝顧問 虫を語る

四月廿二(十八)号「大野林火会長を語る」に続きまして、今回は、関西の西宮市に住む俳人協会顧問、阿波野青畝先生にお話をしました。お弟子さん一人である前田野生子さんにお任せして、身近な題材の虫についてお話ししていただきました。興味のとて子夫人も途中加わってくださり、話がはずみます。

野生子 青畝先生は今日はお話を聞かせていただきありがとうございます。いまは夏に近づいてきました。お弟子さんが一番興味をもっているのは、虫の事から何となくお話を聞かせてください。

## アリ

青畝 さあ、アリの話は、僕もよく聞かされてきました。アリの社会は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

野生子 ええ、大正十一年の作品ですね。「蟻の道」で、アリの社会が描かれています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

青畝 その場合の蟻の道は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

野生子 バラエティに富んだ虫のお話、ありがとうございます。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

奥に乗られて、身振りもまじえ...



野生子 その「蟻の道」は、アリの社会が描かれています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

## アリ地獄

青畝 たた蟻の道があるなど見ただけで通り過ぎてしまつたのは惜しいです。句にならぬが、蟻の道は、人間社会とよく似ています。

## クモ

僕が少年時代に蜘蛛が網をばつて他の虫がつかうた蜘蛛の網に、何故蜘蛛だけがつかないのかという事が不思議だ。その謎は、蜘蛛の網の構造にある。

## イナゴとハチ

青畝 蟻を食べるイナゴとハチの争い。これは、自然の摂理によるものだと思います。イナゴは、ハチの巣を壊して食べ物を奪取します。

## 虫の合奏下に読書

野生子 『方面』に「虫の灯に読みたかぶりめしひん」というのがございませう。十八歳の時の作品ですね。

## 好きな虫

野生子 ある時は腹白で、ある時は読書の先生の少年時代のお姿が目に見えるように書いています。どこで先生の好きな虫は何ですか。

## ネキリ虫とセミ

青畝 根切虫は、アリの社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

## 子供のころの遊び相手

青畝 僕の子供の頃ね... 蛇でもバブル位の大きさで、アリの社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。アリの社会は、人間社会とよく似ています。

野生子 「水ゆれて鳳凰堂へ蛇の首」の句をお作りになられた時、そんな幼い日の細草が胸をかすめたのではないのでしょうか。



S. NAKANE

角川書店 〒102 東京都千代田区富士見2-13-3 振替東京3-195208

### 入門歳時記

大野林火監修 俳句文学館編

角川小辞典 30 定価 一、六〇〇円

◆ 現代生活に密着した季節・季語約八〇〇を厳選した入門用俳句歳時記の決定版。すべての例句にルビを施し、俳句を読みやすく親しみやすいものにした。

◆ 例句中の一句に鑑賞文を付し、俳句の理解と実作、季節の情趣の理解に役立つようにした。

◆ 五十音順索引により、本題及び傍題解説文中の季題など二五〇〇語の検索が可能。

### 第四回東京大神宮親月祭俳句会

▼ 本年度の親月祭を次の通り行いたいと思っております。お誘い合せの上出席下さいませ。尚、本年は特に、東京大神宮創建百年祭の記念すべき年であり、賞品をたくさん用意いたしましたのでお申し込み下さいませ。

日時 九月二十三日(火)午後五時 開会

場所 東京大神宮(国電飯田橋駅下車)

会費 千円(句会費を含む)

講演 松本 旭

選者 大場美夜子・成瀬松桃子・原裕・村田修・山田みづえ

(尚、前日出句の部も選者は同じです)

句会 当日 二句

祭事 入選句発表(優秀作品に対しては各賞の賞品を贈呈いたします)

前日出句の部 応募要領

会費 一口千円・三句(題は月と限らず四季を通じての雑詠)お一人にて何句応募されても結構です。

× 切日 八月三十一日(当日消印有効)

投句先 東京大神宮親月会係宛

御住所、御姓名は描書でわかりやすくお書き下さい。

用紙は二〇〇字詰原用紙か、便箋に。

▼ 宛先 角川舎 〒102 東京都千代田区富士見二二四 東京大神宮事務所 親月会係

TEL (03) 2621-1100

主催 東京大神宮 協賛 俳人協会



吟行旅中訪

魯迅墓

金子兜太

旅を来て魯迅墓に泰山木数花

けもののごとき温き黄濁の初夏長江

大地をゆく夏の白花手に挿頭し

黄河

香西照雄

沃野新緑蛇行の黄河締めつけて

奇岩ばかり銭荷ひたすら拡大す

撥音涼し華語も鳥語も解したく

江南

下村梅子

江南の麦藁をもて籠を編む

具に越にしろじろと咲く合歡の花

文先生手づから扇賜りし

陽炎

千代田 萬彦

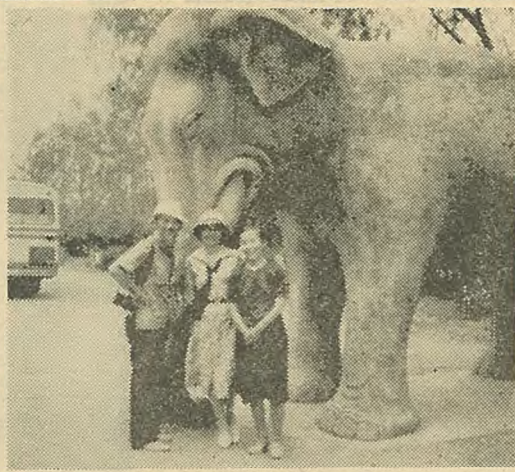
赤土に赤きかげろふ驟馬鳴けり

蜂飼や長城万里雲を馳す

夜航汽笛も水の蘇州やほととぎす

俳人協会訪中団に参加して

井本農



明十三陵前の記念撮影

まず中国の暖かい歓迎に深く感... 謝したい。中国はかつては日本に... 対しはるかに先進国であったが、... 今や近代化の進めを取り戻そうと... 必死に努力している。私は、その... 実情をこの眼で見、いろいろ考え... れることも考えて頂きたいような... させられた。

訪中印象

岸 風三樓

まず何より、百聞一見に如かず... ということを身をもって知り... ました。東京から僅か数時間の海... を越えたところに、こんないい隣... 国があるとは、揚子江と万里の... 長城の印象しか持っていなかつた... 私にはすべてが驚異でした。

人民公社の田植え

俳人とは因果なものである。旅... の先々で動物や植物が気になって... 仕方ない。天候のことが朝毎の換... 移になる日本のことは忘れてしま... った。あの朝、あの草と聞いてし... ままに、尋ねるのははなれて、... 中国の李先念、文連先生、張先生... 動物館の二コマ。

北京の雀

山田みづえ



北京の朝

蘇州の名園の一つ拙政園で字や... 書をめぐり歩いていると、鶴の... を聞いた。飛び出して空を仰ぐと... 正しく鶴。かちがらす、朝鮮風で... ある。つい、大声で皆さんを呼ん... だしました。私の志に添うかの... ように、鶴は群をなして力チカチ... と合奏しながら堂の上、柳の向う... に消えるまで群舞をほらつきと... 見せて呉れたのである。この他に... 白頭翁と青へんた、上海のホテ... ルからは編組にもお目にかかっ... て、更に太湖三山では墓にも会っ... て私は満足していた。つまり中国... 動物館の二コマ。

中国大陸旅行

堀 古蝶

十日ほど中国を旅して帰った... 故園を離れて大陸を漂泊し... ていると、流れゆく「時」の大... きさ、人間の営みのはかなさを... ひしひしと感ずる。それは旅の... 感傷のためだけではない。北京... 故宮、始皇帝の万里の長城など巨... 大な歴史の遺物が時の悠久を訴... えかけてくるからである。故宮... (紫禁城) は明・清兩王朝の... 夢の跡で、現代中国に残る最大... の宮殿であるが、それもいまは... 「近代化」のための観光資源に... なっている。極彩色の宮殿のア... ンサンブル、その上をび交う... ツバメは日本のツバメより大き... く、ひっきりなしに青空から声... を降らせていた。「燕舞ふ故宮... ち中国人の世界観を表す。その... 花房が風に吹かひびき、ミツ... 朧望のすまじは、北風西北... ツを集めていた。北の眞民族の... うた。明朝三帝の皇帝は、こ... 侵入を防いだ長城も無用の長物... になり、そのうえにそびえる大... を感ずる日本人の世界観の遠い... からきている。(東京新聞・六月十日・筆洗)

- 長谷川泰全句集
雑草(長谷川零余子)
渡津船(原田九平)
花水(日野草城)
飯車手(〃)
青玄(〃)
夏(〃)
夏(〃)
夏(〃)
夏(〃)
八重杉句集(八重杉)
桃は八重(細見綾子)
餐燈(細谷源二)
照輝男句集(照輝男)
教師(堀井春一郎)
新訂普羅句集(前田普羅)
飛龍油(〃)
能登(〃)
龍雨俳句集(増田龍雨)
夜の牡丹(増田手古)
合歡の花(〃)
松苗(松瀬青々)
新唐(松原地蔵)
燈台(〃)
夏山句集(松原夏山)
寒霧抄(松村蒼白)
非虫句集(水落盛石)
露石句集(〃)
向日葵(三橋慶文)
魚の鱗(〃)
羊歯地獄(〃)
撫(〃)
三橋慶文句集(〃)
真神(三橋敬雄)
寒林(吉吉英雨)
冬の土(宮林賢城)
寸七翁句集(宮部寸七翁)
鬼城句集(大須賀乙字編)
続鬼城句集(村上現城)
露月句集(第三卷)(村上露月)
露(森川曉水)
冬鳥(初山祥月)
連日(〃)
江戸庵句集(〃)
水陽炎(八木給鹿)
草雲雀(柳原極堂)
黄旗(山口響子)
七隴(〃)
妻(〃)
掃去来(山口草堂)
海鏡(横山白虹)
銀鏡(吉岡禪寺)
故郷(吉岡冬葉)
左衛門句集(吉野左衛門)
重慶(米沢喜赤紅)
水田句集(渡辺水田)
白日(〃)

東京都

高橋清(春燈) 高橋清馬子(麗流) 末(麗流) 飛田清子(野火) 杉浦...

山梨県

赤堀春江(裸子) 上田正久(ホトトギス) 裸子・玉藻・他...

長野県

若林玄洞(白魚) 清水哲(火燧) 寒雷(笠原若菜) 馬酔木...

新潟県

宮田静江(春燈) 山岸珠樹(風) 菅沼謙忠(浜・河原)...

静岡県

府川鈴(浜) 加藤凡一(小愚) 夏目隆夫(風) 山田英洋子(ぬか)

愛知県

佐藤敏水(春燈) 河口信一郎(松) 鈴木丁魚(狩) 堀江一重子...

神奈川県

明石晃一(春燈) 権守桂城(河原) 榎海(土屋実郎) 末野野...

茨城県

林乃婦子(かびれ) 情見蒼石(稚) 山田龍(馬酔木) 杉村清造...

群馬県

山田龍(馬酔木) 杉村清造(馬酔木) 木宮川重雄(水澤魚)...

千葉県

青木威(木語) 大橋一(虎落) 大岡清博(沖) 前田生...

埼玉県

下川白淵(春燈) 小林美夜子(水) 前田是清(海彦) 西村好風...

栃木県

上原重雄(稚) 小林昌久(稚) 上原重雄(稚) 小林昌久(稚)...

群馬県

山田龍(馬酔木) 杉村清造(馬酔木) 木宮川重雄(水澤魚)...

香川県

塩田龍(海彦) 堀江龍(稚) 堀江龍(稚) 堀江龍(稚)...

徳島県

中谷善枝(雪解) 清藤子村(龍巻) 坂本泰雄(馬酔木)...

高知県

友近古(浜・星) 玉井北男(南) 坂本泰雄(馬酔木)...

福岡県

井屋東(ホトトギス) 万登(中) 野郎子(雪解)...

七月集

夏山 速水 草女吹田 鉾杉の夏山かけすの声しほる 澤の水いく澤めぐり夏あざみ...

昭和55年新入会員 第一期

山梨県 赤堀春江(裸子) 上田正久(ホトトギス) 長野県 若林玄洞(白魚)...

福島県 福島県 福島県 福島県 福島県 福島県 福島県...

サカナと佐渡方言(金子のぼる) サカナは、アジ科のサカナで、成長とともに呼び名が変わる...

「昭和55年度秋期俳句講座」ご案内 九月十六日(金) 十月三日(金) 十月十七日(金)...

第2回山形県俳句大会案内 日時 昭和五十五年八月二十四日(日) 午後二時 会場 山形市市民会館小ホール...

山形県俳句協会 山形県俳句協会 山形県俳句協会 山形県俳句協会...



### 松村月溪墓

「俳句」誌上に連載 になるのだが、これになり、  
された「俳句」誌上に連載 になるのだが、これになり、  
「二夜四歌仙評釈」が近く二本 に於て、月溪自撰・晩台・青嶺  
の四人で巻かれたものである。文化七年七月十七日没、享年  
六十。はじめ洛南の大連寺に葬  
に師事し、蕪村門の逸材として  
知られるが、一方画家として  
四條派の棟梁として名高い。蕪  
村の墓のあるところである。  
村没後、墓を田山忠孝に師事せ  
んとしたところ、吟筆はともに  
は興春の号を用いた。墓碑の文  
研鑽しようとしたところ、月  
字は「俳句」の意を表すよう  
にされたものである。  
あるが、これは四條派の第一人  
者としての彼の才質を物語るも  
寺下の松下車、東南へ、一乗  
【写真・文・星野素丘人】



### 俳句から鑑賞

#### 海開く合図か昼の揚花火

石塚 友二

「海開く合図か」には、予期しな  
を、改めて鑑賞しているとい  
「海開き」は七月一日頃に行わ  
れるのが多いのだが、年々早  
なり、今年では五月二十五日  
千葉の御宿海岸でまず曇りの中  
で行われた。各地の海水浴場  
も六月から七月にかけて「海開  
き」が盛大に行われることであ  
る。

「海開き」の句である。海開き  
は海水浴場開きで、遊泳禁止にな  
つて海水浴場はこの日から解  
禁となる。自由な水遊びが楽しめること  
となる。日本では水着を着て  
海水浴を楽しむようになったのは  
明治以後のことだ。昔は信仰のた  
めに海へ入ることを避けてはそ  
ような習慣がなかった。後年海水  
浴場が観光地として栄えたときか  
ら、「山開き」「川開き」になら  
なつた。

「海開き」といふのは、遊泳禁止の  
解除は解錠に過ぎないが敢て  
触れてみたい。

もつとも新しく感じたのは  
「海開き」の句である。海開き  
は海水浴場開きで、遊泳禁止にな  
つて海水浴場はこの日から解  
禁となる。自由な水遊びが楽しめること  
となる。日本では水着を着て  
海水浴を楽しむようになったのは  
明治以後のことだ。昔は信仰のた  
めに海へ入ることを避けてはそ  
ような習慣がなかった。後年海水  
浴場が観光地として栄えたときか  
ら、「山開き」「川開き」になら  
なつた。

### 青嶺峰つづるさとの川背で泳ぐ

大野 林 火

「青嶺峰つづるさとの川背で泳ぐ」  
を流れる。筋の川、そこに青年の  
たのしみ「泳ぎ」を思い浮かべたこと  
泳ぎ、山間でも見られる。その胸中  
景である。さしずめ私などは  
「青嶺峰」の青年の心で青嶺峰な  
る。

「青嶺峰つづるさとの川背で泳ぐ」  
を流れる。筋の川、そこに青年の  
たのしみ「泳ぎ」を思い浮かべたこと  
泳ぎ、山間でも見られる。その胸中  
景である。さしずめ私などは  
「青嶺峰」の青年の心で青嶺峰な  
る。

### 尊氏の墓

皆川白陀

横須賀東光寺に降参り、國  
道を左の方へ歩いて行くと、右に  
東照宮・浄徳寺などがある。その  
先の山の内側を越え、二百メー  
トルほど行った右側の山頂という  
バス停の所に、長壽寺という寺が  
ある。山号は尊皇山。  
ある日、同村の人達に招かれて  
精進料理を食べに行つた。小さい  
な山門の扉は閉めてあり、右へ  
少し登ると横門がある。紅梅、白  
梅が盛りで、小じんまりした寺であ  
るが、経書によると、昔は七堂  
伽藍を備え、関東語山第一の寺、  
であったといふ。

私は、鎌倉の事な大体は知つ  
た。鎌倉の事な大体は知つた。  
鎌倉の事な大体は知つた。

### 追悼

昭和54年  
長岡郡(7・23) 河・藤牙  
春田 薫(12・3) 荻原火・鷹  
昭和55年  
江尻和子(1・31) 藤鉄  
林 薫(3・4) 藤緑  
小沢明子(3・7) 林苑  
石山多志(3・7) 夏野  
中村孝太郎(3・12) 鶴  
吉田貞子(3・30) 野火  
安部井次郎(3・31) 野火  
山本朝花(4・15) ホトトギス・  
夏草  
高松香村(4・16) 冬草・天街  
甲賀山村(4・21) 馬酔木  
山根章(4・21) 雪舞  
山本 雄(4・27) 鶴  
江口土公(4・28) 林苑・地帯  
田村了映(5・1) 夏草  
森 玄(5・3) 壺  
柏村貞子(5・28) 鶴草  
湯目秀映(6・7) 夏草

### 尊氏の墓

皆川白陀

横須賀東光寺に降参り、國  
道を左の方へ歩いて行くと、右に  
東照宮・浄徳寺などがある。その  
先の山の内側を越え、二百メー  
トルほど行った右側の山頂という  
バス停の所に、長壽寺という寺が  
ある。山号は尊皇山。  
ある日、同村の人達に招かれて  
精進料理を食べに行つた。小さい  
な山門の扉は閉めてあり、右へ  
少し登ると横門がある。紅梅、白  
梅が盛りで、小じんまりした寺であ  
るが、経書によると、昔は七堂  
伽藍を備え、関東語山第一の寺、  
であったといふ。

私は、鎌倉の事な大体は知つ  
た。鎌倉の事な大体は知つた。  
鎌倉の事な大体は知つた。

### 八月刊行

現代俳句選集

編集者の「現代俳句選集」第  
集はその後、校正に予想以上の時  
間を要し、刊行は八月となる見込  
みです。

### 「自註現代俳句シリーズ」より抜粋

第二期「沢木 欣一集」より  
水塩の点滴天地力合せ  
塩の最も濃く付着した砂を箱に入れて漉したのが  
水塩。箱の枠から水塩が滴り落ちる。天地の神  
の力が一つになった神秘的な滴り。  
昭和三〇年作

第三期「江口 竹事集」より  
芭蕉林 蝙蝠の空暮残り  
昔は藩邸で芭蕉林の流れも湧水で深く澄切つて美  
しい江津荘。家に灯が入り庭園燈もともり、芭蕉  
林の暮れ残った空には蝙蝠が飛交う。  
昭和三七年作

同「瀧 春一集」より  
青海に額ぶつけて泳ぎ出づ  
葉山御用邸のうしろの海、元は絶対に吾々の近寄  
れなかつた所で泳いだとき、臆病で飛び込みは嫌  
いなのだが、好い気持ちで岩の上から飛び込んだ。  
昭和五二年作

同「平井さち子集」より  
萱草沖に日本領土なし  
手の届きそうな近きでソ連領となつた海や島が見  
える地。「国境」という言葉が切実に迫ってくる。  
彼地の岬にもえを萱草が咲いているのだろうか。  
昭和五二年作

### 編集後記

紫陽花の大きな花の紫  
が濃くなった。北鎌倉  
の明月院は紫陽花見物  
の客で溢れている。今  
か二十年前ほど前までは、この  
紫陽花は土産の者しか知らなかつ  
た。だから、いつ行っても人影を  
見ることがなかった。一人で花に  
囲まれている上に身体がむくむく  
と染まって、海の下にいるよう  
な気分だった。それが新聞で紹介  
されてから、今のようになりにな  
つてしまった。鎌倉にはまた他に  
も紫陽花の美しい庭があるが、人  
に知られていないところばかり  
に思っている。探してご覧になつ  
ては如何。

△さて、今月は増ページ、  
阿波野青歌先生からお話を伺つて  
とが出来たことは嬉しい。テーマ  
は「虫について」で先生ご自身の  
希望。

△さて、訪中が無事帰国したので  
その特集もした。訪中記について  
は詳しい記録を二冊にまとめて刊  
行予定です。

△今月からのコラムの高橋悦  
男さんは蘭人だが、ご本業は英  
文学者。たのしみである。  
(華間)

森 鶴外

日	時間	内容	講師
第一日 7/28(月)	10時~11時10分	俳句取扱 の留意	浦野 芳南
第一日 7/28(月)	11時20分~12時30分	季語につ いての諸 考察	大島 民郎
第一日 7/28(月)	13時30分~15時0分	おくのほ そ道雑感	松藤女子学 院大学教授 大谷 篤蔵
第二日 7/29(火)	10時~11時10分	俳句の写 生	森田 幹
第二日 7/29(火)	11時20分~12時30分	俳句鑑賞 の基本	香西 照雄
第二日 7/29(火)	13時30分~15時0分	正解 山口 誓子	桂 樟子 後藤比奈夫 見市 六冬 田中 克巳
第三日 7/30(水)	10時~11時10分	実作指導 (句会)	羽田 岳水
第三日 7/30(水)	11時20分~12時30分	同上	同上
第三日 7/30(水)	13時30分~15時0分	同上	同上

### 俳人協会主催 第一回関西夏季国語研修講座

中学校・高等学校の国語科授業における俳句(古典・現国)の指導に役  
立てていただくべく左の通り三日間の講座をひらきます。多数ご参加下さ  
い。なお、参加は、中学校・高等学校の国語教師に限ります。

期 間 昭和55年7月28日(月)~7月30日(水)の三日間  
会 場 大阪市天王寺区石ヶ辻町38の1 なにわ会館  
会 費 参千円(テキスト代含む)  
定 員 六十名

※申込み 7月10日までに左記宛先にお申し込み下さい。  
〒665 宝塚市野上四丁目8の22  
俳人協会関西支部  
振替口座 神戸一八六一  
電話 〇七九七二一九七二